

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00011

研究課題名(和文)善・美・正義の倫理的解明を目指す後期プラトン哲学の存在論・認識論的探究

研究課題名(英文)Ontological and epistemological investigation of Plato's later philosophy for the ethical elucidation of goodness, beauty, and justice

研究代表者

栗原 裕次(Kurihara, Yuji)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：40282785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、プラトンの後期著作の内、特に『パルメニデス』『ソフィスト』『政治家』を熟読することで、プラトン哲学が存在論と認識論の側面からどのように善・美・正義を解明しようとしているのかを研究した。『パルメニデス』は中期プラトン哲学が主題とした善・美・正義を探究するためには訓練が必要であることを示していること、『ソフィスト』は存在論の中核にある「異なり」のアイデアの重要性を強調していること、『政治家』は哲学的問答法を正しい政体の説明のために活用する意味を究明していることを、それぞれ明らかにした。そのことによって、プラトンの中期哲学と後期哲学の異同について独自の見方を提出できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プラトン哲学を理解するための重要課題である中期哲学と後期哲学の関係について、アイデア論の取扱い方や政治哲学の展開といった側面から解明を目指した。その結果、中期に探究された善・美・正義は後期においても引き続き中心的に探究されていること、しかしその探究前に哲学的問答法の習熟が重要であること、アイデア論の精緻化がなされていることを明らかにした。また、政治哲学についても哲学的問答法の実践により、新たな探究が始まっていることを示した。

研究成果の概要(英文)：This research studied how Plato's philosophy elucidates the nature of goodness, beauty, and justice from ontological and epistemological viewpoints, by reading the Parmenides, Sophist, and Statesman in detail. The Parmenides shows the necessity of training dialectic before investigating into goodness, beauty and justice that are thematized in Plato's middle dialogues. The Sophist emphasizes the importance of the Form of Difference as a core factor of the Platonic ontology. The Statesman explains why dialectic is important for inquiring into the just constitution. Through these studies, this research could present a unique view of the relationships between Plato's middle and later philosophy.

研究分野：西洋古代哲学

キーワード：プラトン 存在論 認識論 倫理学 政治哲学 哲学的問答法

### 1. 研究開始当初の背景

プラトンの中期と後期とでは哲学の対象やあり方が異なっていることがよく指摘される。このことから、プラトンは後期に至って自己批判を踏まえた自己の新しい哲学を打ち出していると主張されることもある。研究者の間でも「統一派」や「分断派」と二分される元となる、プラトン哲学全体の理解に関わる、このような見解の是非を問うためには、本研究は後期著作(特に中期との関係を問われる著作に絞って)を丹念に読解し、特に問題になるイデア論や政治哲学の展開を検討することが必要である。そのために本研究は中心課題をプラトンの善・美・正義の把握の仕方に認めて、存在論と認識論に光を当てて研究をすることにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、プラトンの後期著作『パルメニデス』『テアイテトス』『ソフィスト』『政治家』などのテキスト解釈に基づき中期と後期のイデア論の異同を明らかにし、後期プラトンが存在論と認識論のより確かな基盤の上で、初期以来の探究対象であった善・美・正義の理解に向けた新たな道を歩んでいることを示す。さらに、『国家』から『政治家』(最終的には『法律』)にいたる政治哲学の展開についても研究を開始する。これらの作業を通じて、哲学と倫理学を総合的に捉えるプラトン哲学の今日的意義を探究すると共に、その成果を論文や発表等を通じて国内外に発信していく。

### 3. 研究の方法

プラトン後期著作の精読(ギリシア語原典を注釈書・既存の翻訳の手助けを借りながら読解する)と古今東西の先行研究の批判的調査により、プラトンの後期哲学の特徴を洗い出し、中期著作に見られる哲学的諸見解と比較する。また学会や研究会での発表や論文の発表を通じて、国内外の研究者と意見交換や共同研究を行うことで、自説の吟味を受け、より説得的なものに鍛え上げていく。

### 4. 研究成果

本研究で主として取り扱った後期対話篇は『パルメニデス』『ソフィスト』『政治家』である。まず『パルメニデス』の研究は、ほとんど先行研究が注意を払うことがなかった「移行部」に光を当て、プラトンが中期と変わらず、善・美・正義の哲学的探究を課題としていることを明確化し、その探究のための準備としての論理的訓練を重要視している点を明らかにした。

次に『ソフィスト』については、中期ではほとんど扱われなかった「異なり」のイデアが「ない」の分析で活用されている点に注目し、言語論との関係も踏まえて、プラトンが存在論の新しい一歩を踏み出している点を見出した。このような両対話篇の考察から、プラトンの中期哲学と後期哲学とでは、イデアを学びの対象とする理解それ自体には基本的に違いがないものの、それでもしかし、学びの実際を比喻や物語を使って説明する中期著作に対して、後期では学びを可能にするより根源的なイデア(ある「異なり」のイデアなど)がどのように相互に関係しているかを明晰化することで、学びの成立それ自体を問題化する傾向があると言える。学びの成立の解明は、学問論として後期プラトン哲学の大きな柱となっている点も指摘できるだろう。(この点は、読者論の文脈からも説明できる。中期対話篇は読者として大衆を意識しており、学びの重要性を大衆にわかりやすく示しているが、他方で、後期対話篇はプラトンの学園・アカデメイアで学ぶ若者たちをターゲットとしていて、より高度な哲学的分析が試みられている、とも言えるだろう。)

また政治哲学については、『政治家』に集中して多角的に研究を進めた。注目すべきは、中期対話篇と同様に『政治家』でも「物語・ミュートス」(神話)が導入され、読者の学びを補う役割を果たしている点である。確かに、その意味で厳密さよりもわかりやすさが優先されているが、しかしこの「ミュートス」はあくまで分割法という後期に特徴的な哲学的方法を補完する役割を果たしているにすぎない点は見逃せない。また、中期にも使用された「範型・範例」を意味する「パラダイグマ」の方法は、『政治家』ではより徹底的に方法論的に精妙化を極め、哲学的問答法の有効な武器となっている。これらの点を本研究はテキストに基づいて論じることができた。さらに、『政治家』で強調すべきは、その政治理論が今日でもかなりの程度有効だと思われる点である。本研究が取り扱った、6つの政体の議論は、真実の政治体制である、政治的知識に基づいた「ただしい政体」との対比で体系的な分類を試みており、アリストテレスの『政治学』を介して、今日の「法の支配」と「人の支配」の説明の基礎となっている。後期プラトンは、哲

学的問答法の実践により、はるかに論理的で説得力のある議論を展開しており、それゆえ、より普遍性を帯び、今日の政治状況を分析するにも有効であると結論できた。これらの研究成果は論文や著作で発表されたが、同時に、学会でも口頭で述べられており、質疑応答の中で諸研究者によって具体的に検討が加えられている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 栗原裕次	4. 巻 519-8
2. 論文標題 プラトン『政治家』にみる「人の支配」と「法の支配」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 33-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 KURIHARA, Yuji	4. 巻 60-3
2. 論文標題 Two Images in Plato's Statesman 277a-d	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of Greco-Roman Studies	6. 最初と最後の頁 183-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 栗原裕次	4. 巻 517-8
2. 論文標題 『パルメニデス』篇「移行部」(135b5-137c3)の研究 後期プラトン哲学へのプレリュード	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栗原裕次	4. 巻 62
2. 論文標題 プラトンの魂論と「心の哲学」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 哲学誌	6. 最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Yuji Kurihara
2. 発表標題 Two Ontological Functions of the Nature of Difference in Plato's Sophist
3. 学会等名 International Plato Society, XIII Symposium Platonicum (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栗原 裕次
2. 発表標題 プラトン『政治家（ポリティコス）』にみる「人の支配」と「法の支配」
3. 学会等名 京都ヘーゲル読書会 夏期研究例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuji Kurihara
2. 発表標題 Two Images in Plato's Statesman 277a-d
3. 学会等名 The 3rd Asia Regional Meeting of the International Plato Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 浜本 裕美、河島 思朗（第10章 栗原裕次）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 388
3. 書名 西洋古典学のアプローチ（第10章 哲学と文学の対話 プラトン『政治家』篇のミュートス(268d5-274e3)	

1. 著者名 伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留（編）栗原裕次（第7章執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 世界哲学史1（第7章 ソクラテスとギリシア文化）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------